

『歎異抄』のおはなし②第十四条(1) 「滅罪」ではなく「救い」を信じる

◎「念仏^{めつざい}滅罪」の異義

今日から第十四条に入ります。

今回は「念仏^{めつざい}滅罪」という異義のお話で、これは念仏を罪滅^{つみほろ}ぼしの手段とすることであり、第十四条ではこれを批判しています。

自分が犯した罪をなくすために念仏が有効であると信じて、一回念仏を称えれば八十億劫^{はちじゅうおくこう}という長い間に犯した罪を消すことができるとされ、一回の念仏で八十億劫の罪が消えるのなら、十回称えたならばその十倍の十八十億劫すなわち八百億劫という長い間に犯した罪を消すことができるというのが、今回の異義です。

これは前回の第十三条と同じく「専修賢善^{せんじゅけんぜん}」すなわち悪を廃^{はい}して善を修^{しゅう}するということであり、「自力作善^{じりきさぜん}」すなわち自分の力で善を行うことによって救いを見出そうとするものです。

「浄土三部経^{じょうどさんぶきょう}」のひとつである『観無量寿経^{かんむりょうじゅきょう}』は、「王舎城^{おうしゃじょう}の悲劇」と言われる息子アジャセ王子による父親のビンビサーラ王殺しの話と、母親のイダイケ夫人^{ぶにん}がやはりアジャセ王子に幽閉され、そのイダイケ夫人の苦しみを救うために、お釈迦様が様々な説法をする話が説かれたお経です。

お釈迦様はイダイケ夫人に浄土に往生するための様々な救いの方法を説きますが、その中で人間の能力や資質に応じて、浄土を願う人には「上品上生^{じょうぼんじょうしょう}」から「下品下生^{げぼんげしょう}」まで、9通りの往生があることが説かれます。

上品上生^{じょうぼんじょうしょう}、上品中生^{ちゅうしょう}、上品下生^{げしょう}、中品上生^{ちゅうぼん}、中品中生、中品下生、下品上生^{げぼん}、下品中生、下品下生^{くほん}の九つが、九品の往生といわれます。

上品の人はよい行いをした人で、早く浄土に往生できますが、悪いことばかりしていた下品の人は、浄土に往生するまで時間がかかります。

その中でも最も下位の「下品下生」といわれる極悪人でも、臨終の時によき仏法の導き手^{で あ}に出遇い、その人に教えられて、一回「南無阿弥陀仏」と称えれば、過去八十億劫の罪が消えると書いてあり、

どんな悪人でも救われる可能性があることが記されています。

この話が元になって、この第十四条は展開していきます。

◎『観無量寿経』における十悪五逆の罪人の往生

「一 一念に八十億劫の重罪を滅すと信ずべしといふこと。」

「一念」というのは一声の念仏で、一ぺん念仏することを言います。

「八十億劫の重罪」とは、八十億もの「劫」を重ねるという、極めて長い間、迷いの世界にとどまって苦しまなくてはならない重い罪のことで、人間がもつ罪の深さを教えるために、永い時間の感覚で表現したものです。

「劫」はインドの時間の単位で極めて長い時間のことであり、サンスクリット語のカルパ(kalpa)の音訳です。

(現代語訳)

〈たった一回念仏するだけで、八十億劫もの長い間、迷いの世界で苦しみ続けるほどの重い罪が消えると信じるべきだという、念仏滅罪の異義について。〉

「この条は、十悪・五逆の罪人、日ごろ念仏をまうさずして、命終のときはじめて善知識のをしへにて、一念まうせば、八十億劫の罪を滅し、十念申せば、十八十億劫の重罪を滅して往生すといへり。」

「十悪・五逆」というのは、最も重い罪惡を犯した人のことです。

「十悪」は、殺生(生きものを殺す)・偷盗(盗み)・邪淫(よこしまでみだらな男女関係)・妄語(嘘いつわり)・両舌(人を仲たがいさせる言葉・二枚舌)・悪口(人を悪く言うこと)・綺語(誠のない飾った言葉)・貪欲(むさぼり)・瞋恚(怒り)・愚痴または邪見(おろかさ・真理に無知であること)の十の悪です。

「五逆」というのは、殺父(父を殺す)・殺母(母を殺す)・殺阿羅漢(悟りを開いた阿羅漢の聖者を殺す)・出仏身血(仏の身体を傷つけて出血させる)・破和合僧(教団の和合を破壊し分裂させる)の五つの罪です。

「命終のとき」とは、臨終のときのことです。『観無量寿経』に「十悪五逆の悪人でも、日頃念仏

を称えないで、臨終の時に初めて善知識の教えによって、念仏を一声称えると八十億劫の間重ねてきた罪が消滅し、十声称えると八十億劫の十倍の重い罪が消えて浄土に生まれる」と説かれることによります。異義者はこの経説によって、「念仏滅罪」を説くのです。

「善知識」というのは、仏教の道理を説いて仏道に教え導き入れる縁を結ばせる人のことです。多くは人々を正しい仏道に誘い導く高僧で、もともとは、善き友、真の友人という意味です。

「一念まうせば」とは、一声、「南無阿弥陀仏」と言えば、ということです。

「^と十八十億劫」は、八十億劫の十倍で、八百億劫のことです。

（現代語訳）

〈この説は、十悪や五逆という重い罪を犯した途方もない悪人が、日頃は念仏を称えたことがなくても、まさに命を終えようとする^{りんじゅう}臨終のときになって初めて善き師の教えを受け、ただ一回念仏するだけで八十億劫もの永い間苦しみ続けるほどの重い罪が消え、十回念仏すればその十倍の八百億劫もの重い罪が消え去って、浄土に往生できると言っているのです。〉

◎親鸞聖人は一念も多念も否定された

親鸞聖人の師匠である法然上人の弟子の中には、念仏が多くを消すとすれば、念仏を重ねれば重ねるほど罪がなくなると解釈して、一万遍や百万遍などの念仏を奨励する人がいました。

この背景には、親鸞聖人が在世の頃から存在していた「一念・多念」の考えがあります。

「一念」とは念仏を一回称えることであり、「多念」とは数多く念仏を称えることです。

法然上人の門下で、一声の念仏で救われるのか（一念義）、多声の念仏で救われるのか（多念義）という争いが、経文の解釈をめぐる行われたのです。

親鸞聖人は『^{いちねんたねんもんい}一念多念文意』というお書き物の中で、次のように記されました。

「一念往生・多念往生とまふすことなし。」

（現代語訳）

〈一念往生ということも、多念往生ということも、まったくありません。〉

「一念・多念のあらそひをなすひとをば、^{いがく}異学・^{べつげ}別解のひととまふすなり。」

「異学」というのは、^{しょうどうもん}聖道門や仏教以外の道におもむいて、念仏以外の行を修し、弥陀以外の仏を念ずる人のことです。

「別解」とは、念仏をしながら他力をたのまずに、自分の力で悟ろうとする人のことです。

（現代語訳）

〈一念・多念の論争をする人々のことを、異学・別解の人というのです。〉

一念・多念のいずれも、念仏を称えて滅罪の功德を得ようとすることは同じであり、それは自力の称名にすぎず、親鸞聖人や唯円房は、念仏を称えて滅罪の利益を得ようとすることを否定されたのです。

◎十悪五逆の罪の重さ

「これは十悪五逆の^{きょうじゅう}軽重をしらせんがために、一念十念といへるか。」

「軽重」は、ここでは重いことを言います。

（現代語訳）

〈これは、十悪や五逆の罪がどれほど重いものであるかを知らせるために、一回の念仏や十回の念仏と言っていると思われます。〉

親鸞聖人が書かれた『唯信鈔文意』には、以下のような文があります。

「五逆の罪人は、そのみにつみをもてること十八十億劫のつみをもてるゆへに十念南無阿弥陀仏となふべしとすすめたまへる^み御のりなり。一念に十八十億劫のつみをけすまじきにはあらねども、五逆のつみのおもきほどをしらせむがためなり。」

（現代語訳）

〈五逆の罪人がその身に罪を持っていることは、八十億劫の十倍もの罪を持つことになるので、十回「南無阿弥陀仏」と称えよとお勧めになっているお言葉です。一回の念仏で八十億劫の十倍の罪を消すことができないのではないけれども、五逆の罪がどれほど重いのかを人々に知らせるため

に、このように説かれているのです。〉

親鸞聖人がこのように記されているのを受けて、唯円房は十悪五逆の罪の重さを示されたのです。

◎『観無量寿経』の裏に隠された真意とは

また『観無量寿経』というお経には、「顕^{けん}」と「隠^{おん}」の二つの意味があり、お釈迦様が説かれたお経の表面の文意と、お釈迦様が話された裏に流れる真意を汲んで見るのと、二つの見方があると言われます。

『観無量寿経』の真実の意義は、「下品下生」では実は滅罪をすすめられたのではなく、自分は十悪五逆の下品下生の一番下劣な者であって、罪深い私であるということを発見させたいのです。もしこれに気づくならば、自己の努力によって滅罪して救われようというような考えはなくなって、他力によらなければ救われない者であるということに気づくはずであり、これがお釈迦様の真意なのです。

◎「念仏滅罪」は他力の念仏には及ばない

「滅罪^{めつざい}の利益^{りやく}なり、いまだわれらが信ずるところにをよばず。」

「いまだ……をよばず」は、滅罪の功德を信じて念仏するのは、他力の念仏にはいまだ及ばない、という意味です。

（現代語訳）

〈要するに念仏することによって、罪を消し去る利益が得られるということです。しかしその「念仏滅罪^{めつざい}」の考えは、わたしたちが信じる他力の信心からは遠く隔たっています。〉

法然上人や親鸞聖人以前の平安時代の浄土教では、「念仏すれば罪が消えて、命が終わる時に阿弥陀様が浄土に連れて行ってくださる」という信仰が根強くありました。

しかしこれを、法然上人や親鸞聖人が大きく変えることになります。

念仏滅罪の考えは、私たちが信じる他力念仏のありがたさには、まだ到達していないのです。

◎弥陀の光明により金剛の信心を得て正定聚の位に到る

「そのゆへは弥陀の光明にてらされまいらするゆへに、一念發起するとき、金剛の信心をたまはりぬれば、すでに定聚のくらゐにおさめしめたまひて、命終すればもろもろの煩惱悪障を転じて、無生忍をさとらしめたまふなり。」

「弥陀の光明にてらされまいらする」というのは、本願を信じる者は阿弥陀仏の光明に攝取されるという意味です。「光明」は、阿弥陀仏の智慧と慈悲の象徴です。

「一念發起する」とは、本願に帰依しようという心を起こすことで、阿弥陀仏のはからいによって、信心が起こることを言います。

「金剛の信心」は、何ものにも破られることのない、ダイヤモンドのように固い信心で、堅固な信仰のことです。「金剛」とは、金剛石すなわちダイヤモンドを指します。

「定聚のくらゐ」は「正定聚の位」の略で、浄土に往生することが正しく定まり、必ず悟りを開いて仏になることが決定している位のことです。

「おさめしめ」とは、攝取なされて、という意味です。

「無生忍」は「無生法忍」の略で、不生不滅の永遠で不変な真理をさとることであり、この上ない最高の悟りです。「無生」とは生滅を超越していることで、生きるとか死ぬという迷いを超えた究極の悟りのことを言います。「忍」は智慧の別名とされ、ものをはっきり確かめて受け入れることだそうです。

(現代語訳)

〈なぜかと言えば、わたしたちは、阿弥陀様の光明に照らされて、本願を信じる心が初めて起こる時に、決して壊されることのないダイヤモンドのように堅い信心をいただくのですから、その時わたしを浄土に生まれることが決まった人びとの仲間に入れてくださるのです。ですからこの世の命を終えれば、わたしがこの世でつくった煩惱や罪惡の障りを転じて、真実のさとりを開かせてくださるのです。〉

この「一念發起するとき金剛の信心をたまはりぬれば」というのは「信の一念」と呼ばれ、疑いなく阿弥陀仏の救いを受け入れた瞬間のことです。

「行の一念」とは、その喜びが念仏としてはじめて口に現れた瞬間のことです。この二つは別々のものではなく、同時に起こるとされ、どちらも仏様のはたらきです。

「念」の原義には一瞬の時間という意味もあり、「他力の信心をいただいたその瞬間に、往生・

成仏が確定する」のです。

信心が起こった時に往生・成仏する身になることを、「現生正定聚^{げんしょうしょうじょうじゅ}」と言います。

「正定」は、もう後戻り（退転^{たいてん}）することのないポジションのことで、「正定聚不退転^{ふたいてん}」とも言います。

「聚」は仲間という意味です。

この「現生正定聚」という親鸞聖人オリジナルの思想は、浄土真宗の根幹をなす重要な教義の一つです。

「現生正定聚」の思想の反対が「臨終来迎^{りんじゅうらいごう}」と言って、死の間際に阿弥陀仏が現われて浄土に導いてくれるという信仰なのですが、これについては次回お話しします。

◎十悪五逆の者とは私のことであつた

「十悪五逆の者」というのはこの私のことであり、自分は自力ではどうやっても助からないのです。これは自分を深く見つめた時に、阿弥陀仏の救いが必要なのは実は他ならぬこの私であるという、深い自己認識を表しています。

そしてこれは「私は五逆の罪を犯した」という事実認定ではなく、「五逆」という極限の悪を鏡として、自分の内側にある根深い自己中心性を見つめた言葉です。

阿弥陀仏の救いは善いことをした人へのご褒美ではなく、どうにもならない私を救うためのはたらきなのです。

自分の弱さやどうしても捨てられない煩惱、他人を傷つけてしまう心、自分中心にしか生きられない自分を正直に見つめることが、救いに出会うきっかけになります。

◎阿弥陀さんありがとう、という感謝の念仏

「この悲願^{ひがん}ましまさずば、かかるあさましき罪人^{ざいにん}、いかでか生死^{しょうじ}を解脱^{げだつ}すべきとおもひて、一生のあひだまうすところの念仏は、みなことごとく如来大悲の恩を報じ、徳を謝すとおもふべきなり。」

「悲願」とは、阿弥陀様の慈悲にもとづく誓願のことです。

「解脱」というのは、生死^{しょうじ}の苦悩^{くのおう}から抜け出て仏になることであり、煩惱から脱して自由になること、悟りを開くことです。

「如来大悲の恩を報じ、徳を謝す」というのは、阿弥陀仏の大慈悲の恩に報い、その徳に感謝するということです。

親鸞聖人の『しょうぞうまつわさん正像末和讃』には、「如来大悲のおんどく恩徳は、身をこ粉にしても報ずべし、師主知識のししゅちしき恩徳も、骨をくだ砕きても謝すべし」とありますが、この和讃は法話会の最後でいつも皆様にもご唱和いただいている「おんどくさん恩徳讃」にも歌われています。

（現代語訳）

くもし、阿弥陀様が大いなるじひ慈悲の心から起されたこの本願がなかったなら、わたしたちのようなあさましくて罪深い者は、どうして迷いの世界を離れることができるだろうかと考えて、一生の間に称える念仏は、すべてみな阿弥陀様の大いなる慈悲の心のご恩に報い、そのお徳に感謝するものであると思わなければなりません。〉

念仏を称えることで罪を滅ぼそうという異義の考えは、念仏を手段にしており、念仏を称える自分の功德によって、犯した罪を滅ぼそうとしているのです。

それに対して報謝の念仏というのは、どんなにたくさん称えても、称えたことを誇らずに、私がいただいたものに対するお礼の念仏であり、阿弥陀さんありがとう、という感謝の言葉です。

◎他力を信じて報謝の念仏を

私たちが救われるのは、罪惡の有無や善惡の多少によるのではなく、如来の大悲によるのです。ですから、「信の一念」に救われるわけです。

真の救いは凡夫が自力のはからいを投げ捨てて、ただ他力の本願を信じるところにあります。

信心を確立した時点で往生が間違いない（しんじんしょういん信心正因）なら、その上は何のために念仏するのかというと、報恩感謝のため（しょうみょうほうおん称名報恩）なのです。

信心が往生の原因であり、念仏はその結果としての感謝の言葉です。

信心こそが肝要であり、信心によって往生が定まるのです。

次回は7月12日（日）のお盆法要で、第十四条の（2）を拝読予定です。

ご清聴ありがとうございました。